

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. **21**

2022.10

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.



CONTENTS

特集

いぶり

01 北海道胆振東部地震から4年 3町の“未来”を追う

- 脱炭素化×災害に強いまちづくり(厚真町)
- 復興のシンボル「早来学園」開校に向けて(安平町)
- 高・大・地域連携による「人材育成・人材循環」(むかわ町)

05 地域が動く・プロジェクト最前線

- 砂川市 私たちが愛する砂川、責任をもって次世代にバトンタッチする
異業種が一塊になって稼ぐちからで地方創生をするプロジェクト「オアリパ」

07 「なおみちカフェ」から ～地域創生のヒントを探る～

知事が訪問した地域で活躍されている方々を紹介するコーナー

- 留萌編 NPO法人 えんおこ
- 十勝編 株式会社しかおい水素ファーム

09 「つながる。HUBest」 【北海道型ワーケーション普及・展開事業】

人と地域との新たなつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介

- 利尻町定住移住支援センターツギノバ 大久保昌宏さん(利尻町)
- トマール&エベルサ 西川斐子さん(富良野市)
- 日本ワーケーション協会公認 ワーケーションコンシェルジュ 齋藤雄一さん(富良野市)

特集

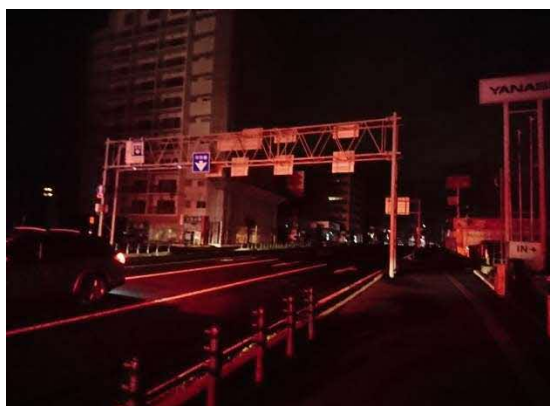
北海道胆振東部地震から4年

3町の“未来”を追う



地震発生

平成30年9月6日午前3時7分、胆振地方中東部を震源とした最大震度7を記録する大規模な地震が発生し、道内に大きな被害をもたらしました。特に震度7を観測した「安平町」、震度6強を観測した「安平町」と「むかわ町」は甚大な被害が発生し、44名もの尊い命が失われるとともに、785名の方が負傷され、大規模な土砂災害や家屋の倒壊、ライフラインの寸断など町民の暮らしに多大な影響を及ぼしました。また、北海道全域で停電（ブラックアウト）が発生し、停電等に伴



▲ブラックアウトになった札幌市内（提供：札幌市）

う主要交通機関の運休、断水、電話の不通など、道民生活や経済社会活動など広範囲に影響を及ぼす事態となりました。

災害復旧・復興

被災地域では、全国各地から数多くのご支援を受けながら、被災された方が1日でも早く日常生活を取り戻せるよう、被害箇所の復旧や生活再建に向けた取組を進めてきました。また、3町では将来のまちづくりのビジョンや具体的な取組をとりまとめた復興計画に基づき、住環境の整備や農林水産業の振興などに計画的に取り組んできました。道でも復旧・復興に向けた考え方や取組方向、復旧・復興対策などを地域と共有しながら、国や関係機関、団体等と連携して「平成30年北海道胆振東部地震災害からの復旧・復興方針」を策定するとともに、具体的な取組内容や進捗状況などを整理したロードマップにより、着実な推進管理を行っています。また、人的支援及び財政支援を通じて、3町の復旧・復興を後押ししています。

創生



発災

復旧・復興

発災から4年が経過し、特に被害の大きかった厚真町、安平町、むかわ町では現在でも復旧・復興に向けた取組を進めています。災害を風化させないためにも、3町の今と未来を取材しました。

復旧・復興 ↓地域創生へ

今年で発災から4年目を迎えました。道が管理している被災した道路や河川などの復旧工事が完了したほか、広範囲にわたって崩壊した森林の再生に向けた取組が着実に進んできています。しかし、元に戻る（＝復旧）だけでなく、地域が活力を取り戻し（＝復興）、ポテンシャルを生かした様々な取組により、「創生」のステージへ繋げていく必要があります。現在、3町はそれぞれの未来の姿を見据えた様々な取組を展開しており、今後のさらなる発展が期待されます。

次ページからは、注目すべき取組、今後の展望、担当職員への思いなど、3町の今と未来を取材しましたのでご紹介します。



▲本郷地区福祉施設跡地に設置された太陽光発電



▲木質バイオマス発電設備

厚真町

脱炭素化×

災害に強いまちづくり

— 震災を教訓にエネルギーの地産地消に取り組んでいると聞きました

胆振東部地震により大規模停電（ブラックアウト）を経験した時に、避難所になった公共施設の一部にバックアップ電源がなく、避難所運営に苦慮しました。今後、いつ起こるかわからない災害に柔軟に適應するためにも、公共施設における非常用電源の確保の重要性を強く認識しました。

また、地域資源をより高度に利用することを震災前から検討しており、太陽光のみならず、町の資源でもある森林の地域内利用を加速化したいという思いがあったことから、震災からの復興に向けた重要な事業の一つとして、この取組を進めています。

「ゼロカーボンシティあつま」を宣言する宮坂町長▼



「ゼロカーボンシティあつま」

2050年二酸化炭素排出量ゼロを目指し、利用可能な自然資本を活用した太陽光・木質バイオマス発電施設整備による「防災力の強化」、公共施設群の再生可能エネルギー活用、「排熱利用による産業創出」を一体的に進めるエネルギー地産地消事業や、被災森林の再生と森林管理による二酸化炭素吸収源の確保といった取組を進めている。

— 現在の取組内容を教えてください

脱炭素化の取組により持続可能な地域づくりを実現するため、二酸化炭素排出量実質ゼロを目指し、本年4月に「ゼロカーボンシティあつま」を宣言しました。

本年3月からは、エネルギー地産地消事業で設置した太陽光発電システムが稼働し、発電した電気は、平常時は町内公共施設の使用電力として供給され、災害時には蓄電池やEVで電力供給をします。

また、今後整備する「ストロベリーパーク」においては、木質バイオマス発電設備の排熱等を活用したイチゴ栽培を予定しています。将来的には「ゼロカーボン」と農業を掛け合わせた6次産業化を目指しています。

— 今後の町の未来像や展開を教えてください

今後はゼロカーボンビレッジ構築計画の策定やゼロカーボン・モビリティ導入事業などゼロカーボン事業を推進していきたいと考えており、計画の道半ばですが、災害時の電力確保や木材資源の地域内利用を促進し「脱炭素先行地域」となるよう目指しています。

厚真町には他地域と比べて特徴的なエネルギー源はありませんが、創意工夫によりゼロカーボン推進に向け努力を続けていきます。そしてこの事業を胆振東部地震からの復興の柱として、新たなまちづくりへの検討を重ねていきたいと考えています。



▲今回お話を伺った藤原めぐみ主任（左）と宮久史主幹（右）

本記事の内容は、厚真町産業経済課・まちづくり推進課で担当しております。
 ○エネルギー地産地消に関するお問い合わせ先 TEL:0145-27-2486(産業経済課)
 ○ゼロカーボンに関するお問い合わせ先 TEL:0145-27-3179(まちづくり推進課)

現在、建設中であり令和5年度から義務教育学校として開校予定となっている「早来学園」▼



普通教室 (イメージ)



創作アトリエ (美術室) (イメージ)

安平町 復興のシンボル 「早来学園」開校に向けて

はやきた

—早来学園の構想が始まったのはいつからですか

震災の被害によって建て替えを検討した早来中学校の建設候補地を選定するにあたって、既存の小学校の隣接地が取得できることとなりました。グラウンド等の用地をこれまでほどの規模は確保できませんでしたが、老朽化が進んでいる早来小学校と一体化した学校を建設することで、再建計画が実現可能となりました。単なる建て直しだけでなく、魅力ある学校施設にして充実した教育環境の再構築を目指したのが始まりです。

また、町では震災前から追分地区で小中一貫教育を進めており、教育効果を向上させることから、「義務教育学校」の選択が適切と考えました。

この計画に対して「早来小中学校統合に合わせて一緒に統合してほしい」との要望が2校加わりましたが地元为学校を残したいと考える地域や保護者の方々も残る中、丁寧に調整を進めていくよう努めました。

—独自の取組や特に力をいれているところはありますか

町の特徴としては、これまで進めてきた学社融合事業など、地域とのつながりを持続できる環境を目指すこととICTなどの先進技術を活用できる備えは万全としながら、本物に触れる、体験できる環境を重要視し、教室や廊下等もいろいろな授業ができる空間として整備していることです。

ほかに、「新しい学校を素敵な場所に」をキーワードに住民同士で話し合いを重ねている「みんなの学校をつくる会」があります。当初は情報提供の場として町教育委員会が始めましたが、参加者の中から未計画部分のアイデアを出させてほしいと相談されたのが始まりで、住民が運営を担う体制に変更して今の「みんなの学校をつくる会」ができました。会には児童生徒や保護者、統合される学校の卒業生などが集まり、簡易な整備を予定していた校舎前の「自然の丘」についての活動を開始しました。会で協議された内容は要望書にまとめ、町教育長へ提出しています。要望するものが全て実現できるとは限らないことを理解しながらの運営は難しいところもありましたが、町民と一緒に学校をつくっていくことができました。

—これからの町と学校の関係をどのように考えていますか



▲児童生徒や保護者、OBによって構成されている「みんなの学校をつくる会」メンバーによる協議の様子

学校環境の整備は、町の理想通りに進んできましたが、実際に教壇に立つ教員は未だ経験したことのない環境となります。これまでの考え方で学校を運営するのではなく、「安平スタイル」の学校として運営できるようフォローしていく必要があると考えています。

発災からこれまで、ずっと仮設校舎に通っている子どもたちは、ようやく新しい学校に通うことができます。様々な魅力ある教育が実践できる環境を整備してきましたので、新しい学校の素晴らしさを子どもたちに実感してもらうことが、町として楽しみです。



▲高校生と大学生でスマート農業研究、農業体験



▲人材育成・人材循環を目指して、鶴川高校・札幌大学・むかわ町の3者で包括連携協定を締結

むかわ町

高・大・地域連携による 「人材育成・人材循環」

——これまで地元教育に力を入れてきたというのですが、その経緯と目的を教えてください

むかわ町の中学生は町外の高校に進学するケースが多いことから、鶴川高校では、入学者の減少に悩まされ、町内からの進学率も低く推移しています。そういった状況を打破すべく独自の「むかわ学」（地域課題探求学習）等を通じて地域が一体となった高校の魅力化を進めています。

「むかわ学」は、むかわ竜・ししやもなどの魅力ある地域資源を活用し、地域振興の観点から、生徒・学生たちが地域社会への貢献や課題を解決する能力を身につけることを目的としています。

震災時には被災し仮設生徒寮に住んでいた鶴川高校の野球部が、災害復旧ボランティア活動を行う中で多くの人と出会い、地域と高校は震災をきっかけに、更に絆を強めてきたことから、「むかわ学」をはじめとした高校の魅力化を進めることが地域活性化、人口減少対策、そして震災復興につながるものと考えています。

——今年3月、鶴川高校・札幌大学・むかわ町が連携した新たな取組が始まりましたが、その内容を教えてください

立場の異なる3者が理念を共有して人材を育成し、高校、大学でそれぞれ学んだ生徒・学生が、将来的には町に定着することを目指しています。

むかわ町のような過疎地では仕事が少ない、若者の地域への定着が難しい現状があります。地域課題の解決を探る「むかわ学」にデジタル先端技術を活用しつつ、札幌大学と協働で取り組み、地方創生を担う人材を高校・大学から育成する仕組みの構築を進めており、生徒・学生の成功体験を通じて、新たなビジネスの創出・関係人口につながることも期待しています。

既に今年の「むかわ学」に大学生が参加しており、意見交換や発表会を行うことで、互いに刺激を受けたようでした。今後は、鶴川高校生の大学訪問や高校生の「むかわ学」提言発表に大学生も新たに参加。さらには、むかわ町関係者が講師となつてこの秋から大学で地域の取組を講義したり、今年から新たに始まった震災復興イベントに高校生と大学生が参加するなど、3者が連携した新たな展開が複数生まれています。

このような取組を行うことで、生徒・学生の地域への関わりを一過性で終わらせず、自分たちで課題を見つけ仲



▲2泊3日のむかわ合宿、高校生と大学生が地域課題について熱く議論

間と課題解決方法を学んでほしい、成功体験を積み重ねて地域に愛着を持つてほしいと考えています。

——今後の展開や町の未来像とは？

この事業の輪に、町内外の教育機関や企業が持つデジタル先端技術の導入を図り、震災で甚大な被害を受けたむかわ町が最優先事項として掲げている「事前復興」（防災）とまちなか再生など未来に向けた「創造的復興・創生のまちづくり」につなげたいと考えています。

また、将来的には、首都圏等に転出した卒業生ともデジタル技術を活用して関わりを持ち続け、関係人口の裾野を広げていきたいとも考えています。そして町に戻り、活動したいと思う生徒・学生がこの事業を通じて増えてほしいと願っています。そんな熱量を持った若者が地域の核になり、次世代の若者を育てるような好循環を目指しています。

Oasis「安心」「安らぎ」
×
文化、歴史、人との交流、街・景観、ものづくり



砂川市

私たちが愛する砂川、責任をもって次世代にバトンタッチする
異業種が一塊になって稼ぐちからで
地方創生をするプロジェクト「オアリパ」

地域ブランド
「オアリパ」誕生

砂川市は北海道中部に位置する人口約1万6千人のまちです。昭和35年をピークに人口減少が進んでおり、労働力人口の減少、消費市場の縮小によりさらなる人口減少を誘発することが懸念され、地域経済の縮小は避けられません。その影響をできるだけ緩やかなものにし、現在の豊かさを維持していくためには、「地域が稼ぐ力」が重要だと考えました。
今回は官と民の力を結集し、地域資源のブランド化、稼ぐ地域づくりを目指す地域ブランド「オアリパ」の取組について紹介します。

500名以上の参加を得て、改めて地域資源の再確認を行いました。
地域住民にとって、身近すぎて当たり前に感じていた石狩川やオアシスパーク、国道12号、JR、高速道路、北海道子ども国などの都市公園、市立病院などは、地域住民の安全・安心・やすらぎを得るために整備されてきた歴史ある大切な地域資源であること、また、市民アンケートにおいて

市民が望んでいるまちづくりは、医療と福祉と産業が充実しているまちであることを確認した上で、砂川市の新たな地域ブランドとして、令和元年に地域ブランドのタイトルを『安心やすらぎ共和国「OASIS REPUBLIC SUNAGAWA BASE Eー』と決定しました。

そこで、稼ぐ地域づくりには、一つひとつの商品やサービスなどの魅力をバラバラに発信するよりも、地域の商品やサービスなどをひとまとめにして地域ブランドとして発信することが有効であることから、市が主体となり、「チームSUNAGAWA 団結セミナー」を5回開催し、砂川市内の企業を中心に延べ



▲チームSUNAGAWA団結セミナーの様子



▲クラウドファンディングを活用して開発したミニトマトスープ「ゆきのとまと」

オアリパは、結成から3年間、セミナーやワークショップなどによる学習、商品・サービスの開発・磨き上げ、展示会・販売会などへの出展による販路開拓、観光周遊コース開発、SNSによる情報発信など、トライ&エラーを重ねながら取り組んできました。

オアリパの取組

「が結成され、商業や農業のほか、医療・介護・福祉、宿泊、工業、IT、不動産、寺院、デザイナーなどの広範囲の異業種、そして市外事業者も参画し、地元高校・大学、金融機関、支援機関からの協力関係を得ることで、産官学金の連携体として活動が始まりました。

地域の5つの世界（文化、歴史、人との交流、街・景観、ものづくり）を「オアシス」と表現し、これら一つ一つが持つ魅力をもっと地域内外に伝えたい、人口減少を地域みんなで乗り越え、愛する地域を責任をもって次世代にバトンタッチしたいという思いで、官民連携プロジェクト「オアシスリパブリック（以下「オアリパ」という）」が結成され、商業や農業のほか、医療・介護・福祉、宿泊、工業、IT、不動産、寺院、デザイナーなどの広範囲の異業種、そして市外事業者も参画し、地元高校・大学、金融機関、支援機関からの協力関係を得ることで、産官学金の連携体として活動が始まりました。

～オアリパが目指してきた3つの機能と取組～

<p>インキュベーション機能</p>	<p>「事業者の拡大・育成を促進、地域の価値の創出を目指す」 定期的な戦略会議、メンバー交流事業などを実施し、メンバーが自主的に連携し商品やサービスを生み出す気づきに繋がり、事業者と農家が連携した農福連携事業が行われるなど、職種を超えた連携事業が生まれています。</p>
<p>地域商社機能</p>	<p>「地域資源をブランド化、生産・加工から販売までプロデュースし、地域内外へ発信」 展示会・販売会など、ふるさと納税やクラウドファンディングを地域外に向けた販路として活用し、地域内ではマルシェなどのイベントを行うなど、地域内外に向けた販路開拓を行い、地場製品の消費を拡大・売上向上に繋げています。</p>
<p>DMO機能</p>	<p>「地域資源を活用し、観光地域づくりを行う」 地域の課題「レンタル（体験観光における必要な器具などの貸出機能がないこと）」「宿泊（宿泊施設の数が少ないこと）」「三次交通（地域内の移動手段が少なく高額であること）」を考慮したモニターツアーを実施し、観光誘客における課題解決のための取組に繋げています。</p>

稼ぐ地域を創るため、参加事業者の拡大・育成を促進し地域の価値の創出を目指す「インキュベーション機能」、多くの関係者を巻き込み、地域資源をブランド化、生産・加工から販売まで一貫してプロデュースし地域内外に販売する「地域商社機能」、さらに、地域資源を活用し、観光地域づくりを行う「DMO機能」を併せ持つ官民連携組織の創設を目指してきました。

今後の展開

令和元年8月29日に任意団体として誕生したオアリパですが、3年の時を経た令和4年8月29日には、商品の販売など営利事業を民間主導で本格的に進めるためメンバーである5人により、一般社団法人オアリパが設立されました。法人の設立は、稼ぐ地域づくりのスタートを切る意味を持ち、地域課題を解決するため官民連携組織の創設を目指してきたことから大きな成果であると考えています。

これまでオアリパは「まちづくりを自分ごととして」、「ひとりではなくチームで」、「地域全体で稼ぐ」、「未来のための人材育成」をキーワードとして取組を進めてきました。

今後も継続的な人材育成、商品・サービス開発、販路開拓、観光周遊などに関わる事業を継続することで、地域の素晴らしさを全世界に発信し、地域を繋げる活力剤、地域の事業者を繋げるプラットフォームになることを期待しています。



▲オアリパが国土交通省第1回まちづくりアワード構想・計画部門で特別賞を受賞

私は砂川市出身で平成29年に12年ぶりにUターンをしました。地域が様々な課題を抱える中、横の繋がりが無いことに不安を抱えていた時に出会ったのが、チームSUNAGAWA 團結セミナーでした。多職種、多世代で地域を想う人たちがいることに希望を感じ、4年以上関わらせていただいています。令和4年8月20日に商店街を周遊し魅力を再発見できるよう、私のお店のイベントとコラボして「瓜祭だヨ！全員集合」と題し、商店街の各店舗でウリ科の野菜販売やウリ科にまつわる限定メニューを提供し、スタンブラリーを実施しました。これは私個人ではとても思いつくはずもなく、オアリパの仲間力があつたからこそ実現できました。この地元を想う人と人の繋がりがこそが、地域の宝になると信じてこれからも力を合わせ楽しく活動していきます。

オアリパメンバーの声



有限会社ウリ薬局
瓜 秀彬さん



『なおみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



遠別町



留萌編

なおみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝えします。



令和4年6月7日訪問

NPO法人 えんおこ 編

今回まずご紹介するのは、遠別町の活性化や地域づくりを目的に様々な分野において活動を行っている、NPO法人「えんおこ」です。

えんおこは、平成26年に、当時の遠別町地域おこし協力隊メンバー3名と、地域移行コーディネーター1名によって設立されました。

当時、協力隊として高齢者の見守りや安否確認などの活動を通じて、町民から「隊員の卒業とともに活動がなくなつては困る」という声を受け、任期終了後も活動を継続し、地域を活性化するため、行政や民間、それぞれの役割を意識しながら活動できるNPOを選びました。

これまで行っていた業務を町からの受託事業として継続しつつ、飲食業やイラスト作成を行うなど、メンバーの個性を活かした自主事業も行っています。

最近では、公設民営の塾も新たに開設し、地域の小中学生の学力向上を図っているほか、遠別農業高校活性化プロジェクトとして、高校・町と連携し、ポスター・パンフレットを一新したり高校の魅力を伝えるWebサイトの開設を行い、入学者数の増加に繋がっています。

このほかに、「パソコンのことで困っていることがある」、「新スポーツのルールや遊び方を教えてほしい」など、町民の「ちよつと困ったこと」にも、相談があれば対応しています。

行政と民間が連携していく上で、どちらの立場にも寄り添えるえんおこは、地域にとって重要な存在となっています。それぞれが地域おこし協力隊でのキャリアを活かし、活動の幅を広げており、今後も「行政と民間との架け橋」として、さらなる活躍が期待されます。

えんおこの拠点である遠別町移住交流センター内には、移住者のための居住スペースも完備



なおみちカフェ（遠別町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
(YouTubeチャンネル)



皆さんの活動と同じことを都心ですとなったら、巨大企業が手がけることになると思います。

小さい町だからこそ、幅広く色々な事業に取り組めることが、やりがいにつながっていると感じました。

当日の知事の言葉から



令和4年7月11日訪問

株式会社しかおい水素ファーム編

次にご紹介するのは、鹿追町で水素を製造・販売する「株式会社しかおい水素ファーム」です。

水素は家畜ふん尿より発生させたバイオガスから製造する、国内初の取組です。

製造した水素は、隣接する水素ステーションで販売されており、燃料電池自動車等への充填や、町内及び近隣施設の燃料電池への供給などが行われています。

乳牛1頭が1年間に出すふん尿から製造される水素の量は、燃料電池自動車が約1万km走行できる量に相当します。鹿追町では、しかおい水素ファームの事業化に伴い、燃料電池自動車を町の公用車や町内の民間事業者の社用車として

導入したり、農業で使用されるフォークリフトも燃料電池のものに更新するなど、町全体で普及に向けた取組が進められています。

株式会社しかおい水素ファームの小林さんは、自身も燃料電池自動車を所有しており、「個人として、会社として、鹿追町のゼロカーボン化を通じて、北海道のCO2となる文化に貢献できれば」と語ります。

本来は、厄介者であった家畜ふん尿を資源として捉え、バイオガスを水素化するという先進的な試みは、道が推進するゼロカーボン北海道の実現にも資するものであり、今後の取組がますます注目されます。

当日の知事の言葉から

今、鹿追町が挑戦しているゼロカーボン化を他の地域に知っていただくことは、自分の地域でどういった挑戦ができるかを考える上での見本になると考えます。

環境と経済を好循環させていくことがゼロカーボン推進の基本であり、この観点でこれからも連携して取り組んでいきたいと思えます。

水素事業化までの経過

平成27年4月

- 環境省委託事業「家畜ふん尿由来水素を活用した水素サプライチェーン実証事業※（平成27年度～令和3年度）」を以下の業者が受託。

【受託業者】

- ・エア・ウォーター株式会社
- ・鹿島建設株式会社
- ・日鉄パイプライン&エンジニアリング株式会社
- ・日本エアプロダクツ株式会社

※水素を「つくる」、「はこぶ」、「つかう」仕組み（サプライチェーン）を作ることで低炭素な水素社会の実現を目指す。

平成29年1月

- ・既存の鹿追町環境保全センターを活用し、「しかおい水素ファーム」を整備。実証運転開始。
- ・環境保全センターのメタン発酵施設で生成されたバイオガスから水素の製造を行う。

令和4年4月

- ・実証実験を終え事業化。
- ・施設が国から町へ譲渡され、町から会社に貸与
- ・国や町の支援を受け、株式会社しかおい水素ファーム（エア・ウォーター北海道株式会社及び鹿島建設株式会社の合併会社）が施設の管理、運営を行う



▲ 懇談の様子



▲ 水素で走る燃料電池自動車



なおみちカフェ（鹿追町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
(YouTubeチャンネル)



Hokkaido
Work x Vacation
北海道型ワーケーション
つながる。感じる。生まれる。

北海道型ワーケーション普及・展開事業

つながる。HUBest

人と地域がつながるベストな場所が北海道にはある



「つながる。ハーベスト」とは？

「新しい働き方」として注目されているワーケーション。その魅力のひとつでもある、人と地域とのつながりを通じて新たな活動を生み出すことができるワーク施設と、そこでの出会いを創り出すコンシェルジュをインタビュ形式で紹介します。

第五弾 利尻町

利尻町定住移住支援センターツギノバ

大久保 昌宏さん



ツギノバ

「ツギノバ」とは？

「ツギノバ」という名前には、どんな想いをこめられているのでしょうか。

ここは閉校となった旧沓形中学校を改修した施設ですが、これまでの歴史や島の成り立ちをきっちり受け継ぎ、次の未来をつくっていきましょつというこで、「ツギノバ」という名前にしました。

利尻町のおススメ

島外から来られた方に、色々と島のおススメを聞かれることも多いかと思いますが、大久保さんは何を勧めますか？

ワーケーション等で来られた方を我々がご案内する時は、「ウニ種苗センター」と「神居海岸パーク」にセットでお連れします。利尻の「つくって・守って・育てる」漁業を体験できる場所だと思つので、必ず見ていただいていますね。



(ツギノバ ホームページ) <https://tsuginoba.com/>

最後に、これからツギノバに来られる方にメッセージをお願いします。

利尻島は自然も豊かで、都市部では見られない風景が本場に沢山あります。夏は過ごしやすいですし、仕事もとてもはかどると思います。一方で、冬の時期も凄く好きです。冬は地域の方がかまってくれて、とても仲良くなれますし、一度来れば、次来た時に「お帰り」と言ってくれる所なので、是非、一度島に来て、仕事をしながらも楽しんでいただければと思います！

事前にワーケーションしたいと相談すれば、案内してもらえますのでしょうか？

はい！僕やスタッフが動ける範囲であればご案内します。

僕自身色々な地域を回りましたが、その地域の人に案内してもらうことが一番賢いかなと思つていて、島や地域に対しての理解度も深まるので、これから島に来られる方にも、是非、利尻の魅力が沢山知ってもらいたいと思います。



◆「つながる。HUBest」

富良野市内でワーケーション受入に取り組む西川さん、齋藤さんをご紹介します。

「トマール」
富良野駅から徒歩ほど近い「コンシエルジュフランド」内にあるホテル「トマール」とキッチン「エベルサ」はどのような施設なのでしょう？

元々、この建物は百貨店だったのですが、閉業して空きビルとなっていたところをリノベーションし、2018年に複合施設「コンシエルジュフランド」として開業しました。

「トマール」と「エベルサ」も同年から運営していますが、コンセプトは一言で言うと「またね」です。来て終わりはなく、何回も通ってもらえるお客様を沢山つくることで、継続して運営していきたいと考えています。

「トマール」で宿泊の方も、合間に「エベルサ」で仕事されたりと、「ワーキングスペース的な使い方も出来ますね。

第六弾 富良野市

①トマール&エベルサ

西川 斐子さん



「エベルサ」は今年レストランではなくカフェラウンジとして営業しています。電源もありWiFiも使えるので、ワーキングスペースとしても利用できます。

「こちらでの人の出会いから、何か新しい取組が生まれたエピソードはありますか？」

「トマール」のシェアキッチンでの出会いは、思い出せないほど沢山あります。当たり前に行く仲になります。連れ立って近場に旅行に行ったり方もいらつしゃいます。

あと、泊まった方がそのままうちで働くなんてことも多くて、ちょうど二週間前に旅行で初めて来て、一週間前から働き始めた方もいるんですよ。働く場所を探している方には、市内の飲食店等を紹介することもあります。

「トマール」はリーズナブルな料金で宿泊でき、共有のシェアキッチンや宿泊個室をワークルームとしても利用できます。▼



ワーク利用も可能な「エベルサ」 ▲

(トマール&エベルサ ホームページ)
<http://tom-eve.com/>



②日本ワーケーション協会公認 ワーケーションコンシエルジュ

齋藤 雄一さん



ワーケーション コンシエルジュとは？

齋藤さんは、昨年から「ワーケーションコンシエルジュ」として活動されていますが、具体的にどのような活動を行っているのでしょうか？

富良野にワーケーションで訪れる方に、富良野の魅力や、ワーク・体験施設等をご紹介します。ワーケーションに関する意見交換をさせていただいています。

基本的には富良野市役所に寄せられたワーケーションの要望や、市の打ち出す事業に基づいて活動しており、今年6月に全国から37名の方にお越しいただいた「富良野ワーケーションチャレンジ」では、交流会や参加者対象のオプションツアーを企画するなど、地域関係者と連携し、取組を進めています。

「これから富良野でワーケーションしようとしている人は、どこに相談すればよいでしょうか？」

まずは、富良野市の公式サイト「ワーケーションフランド」や北海道型ワーケーションポータルサイトを通して、富良野市へご相談いただければと思います。市

と連携して、個人でのワーケーションから企業研修に至るまで、場合によっては費用が必要となることもあります。プランのコーディネートをお手伝いします。

最後にスバリ！富良野でのワーケーションの魅力はなんでしょうか。

皆さんおなじみのTVドラマ「北の国から」をはじめとする文化が、富良野市の大きな魅力です。

単なるテレビのロケ地巡りではなく、自然環境や人の生き方、人の魅力を様々なプログラムを通して体感していただけたらと思います！

このインタビュー記事は、誌面の都合により抜粋版を掲載しています。

インタビュー全文については、北海道公式HPにて公開していますので、是非ご覧ください。



インタビュー全文はHPをCheck!

該当する施設を月1回程度、HPでご紹介！

「つながる。ハーベスト」対象施設

- テレワークができる施設
- 地域を知るコンシエルジュがいる施設
- 誰もが気軽に利用できる施設
- 地域住民も利用している施設

D OORS. hokkaido

北海道の扉を開こう。

「D OORS. hokkaido」は、 北海道各地域との

新たな「かかわり方」を見つけられるサイトです。

様々なかたちで地域と関わる関係人口は、
地域づくりやビジネスなど、多様な関わりを通じて地域社会に新しい風を吹き込んでいます。
本サイトで、北海道の各地域と気軽に繋がるための新しい「かかわり方」をご紹介します。

詳しくは
こちらをチェック

北海道 関係人口



<https://kankei.pref.hokkaido.lg.jp>



Twitter



Instagram



サイトに関するお問合せ先

北海道総合政策部地域創生局地域戦略課
〒060-8588札幌市中央区北3条西6丁目

☎011-204-5131



「創る」バックナンバーは、「ほっかいどう応援団会議ポータルサイト」へ

QRコード読取で
バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議

🔍 検索

URL : <https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html>